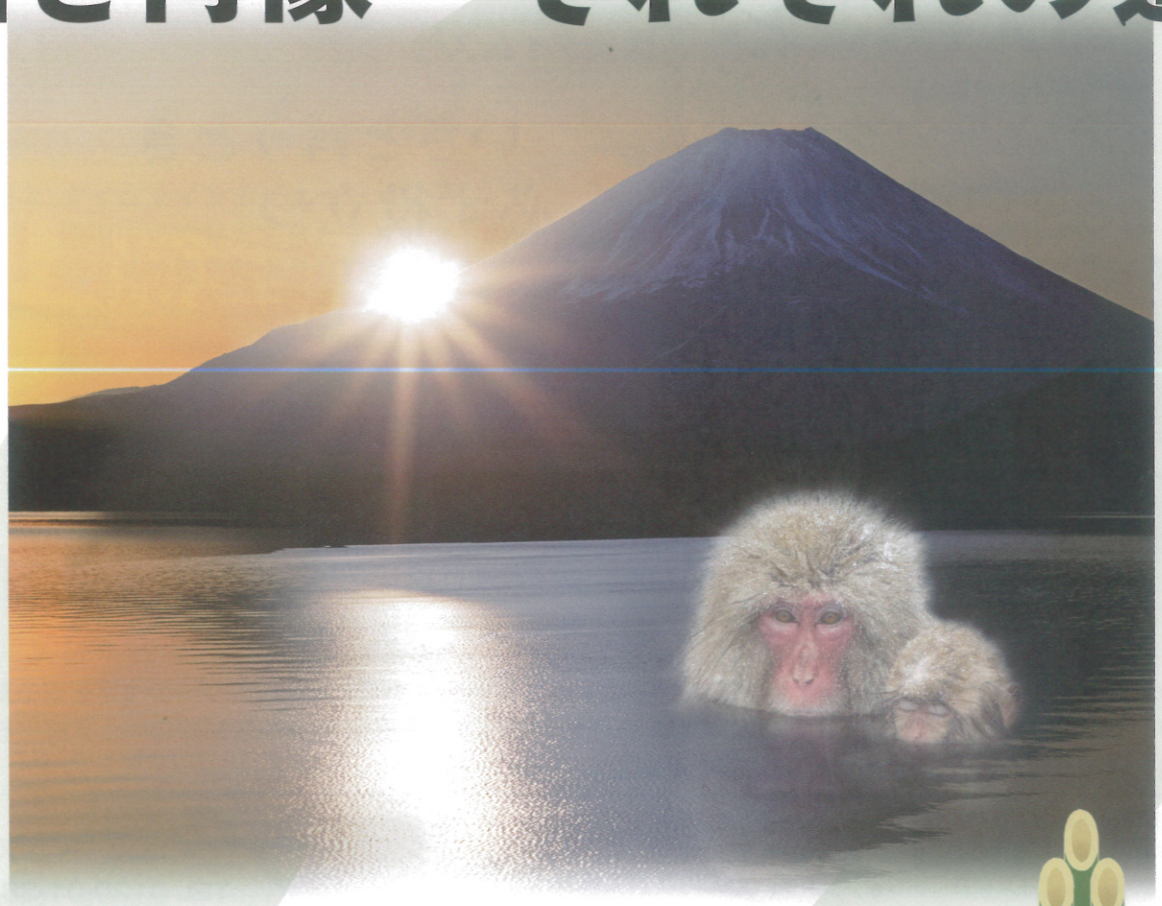
医療タイムス

週刊医療界レポート　2016.1/4 新春号　No.2237

新春特集

若き肖像　それぞれの道



タイムスインタビュー

服用中止で見えてきたアリセプトの副作用
規定外の処方により良好な結果も

医療法人誠弘会池袋病院
副院長
平川　亘氏（前編）

ケーススタディ経営改革力

小児専門病院と同水準を目指す
プレパレーションの導入で子どもと家族をサポート
横須賀市立うわまち病院　小児医療センター

Top News

診療報酬「本体」0.49%引き上げ　政府
来年度予算96.8兆円前後　政府方針

服用中止で見えてきたアリセプトの副作用
規定外の処方により良好な結果も

平川　亘氏（前編）
医療法人誠弘会池袋病院　副院長

認知症治療を大きく前進させるものと期待されたアリセプトは、規定量の服用により症状を悪化させることがある。歩行障害や易怒性などの副作用が発現することがあるのだ。1998年以来、脳神経外科医として認知症治療にあたってきた平川亘氏は、その事実を目の当たりにしてきた。認知症治療の真実を２回にわたってお伝えする。

取材●田川丈二郎

全ての薬の服用を中止すると症状が改善した

――地域中核病院の医師として、15年以上認知症患者を診てきました。

「私は脳神経外科医で、池袋病院に赴任してからも意識障害にかかわる症例を多く扱っていました。もちろん地域病院でありましたから、認知症の患者も来院して、治療にあたっていたわけです。

1999年にアリセプトが登場するまでの認知症治療は、いわば武器を持たないで戦っている状態でした。使える薬はアバン、カランなど今はなくなった脳代謝改善薬、脳循環改善薬だけで、治療は患者の興奮を抑えるグラマリールと若干の向精神薬を用いた、今でいうＢＰＳＤの治療が主でした。

だからアルツハイマー型認知症の治療薬のアリセプトの登場は、これから認知症を治せる時代になると期待しました。しかし思ったほどの治療効果は得られない。治療当初は少し元気になったかなと感じても、半年を経過し１年経つと認知症がだんだん悪くなっていくのです」

――実際にはどうだったのですか。

「こういう事例を経験しました。確か90歳前のおばあちゃんだったと思います。食事が摂れなくなり当院の内科に入院されました。おばあちゃんは寝たきりで、会話もできません。認知症の末期と思われました。内科の主治医から頭部のＣＴを撮る依頼がありましたが、脳委縮があるだけで特段の異常はありません。

そのとき服用していた薬は、高血圧薬、骨粗しょう症薬、そしてアリセプトでした。私は全ての薬を中止することを進言しました。するとそのおばあちゃんは３日目には話をするようになり、起きて自分で食事をしだしたのです。

この出来事は衝撃的でした。服用していた薬を全て止めたら良くなってしまったのですから。原因は神経に関係する薬であるアリセプト以外に考えられませんでした。

結局そのおばあちゃんは元気になり、歩いて自宅に帰りました。末期と思われた認知症もかなり良くなり、物忘れはひどいですが、笑って家族と話ができるレベルに戻っていたのです」

――それはすごい事実ですね。

「その後は、当院に入院する内科、整形外科を中心に、アリセプトを服用している患者をチェックするようにしました。肺炎や骨折で入院しアリセプトが処方されている高齢患者に服用をやめてもらい、しばらく観察するとアリセプトの副作用が見えてきたのです。

例えばアリセプトを飲んでしばらくすると、足が弱くなって歩行障害に陥ったり、嚥下が悪くなり、誤嚥を起こしやすくなる高齢の患者がいます。早い人は１カ月でみられることもありますが、多くの場合、半年、１年経って認められようになります。半年、１年経って足が弱くなっても、食事が徐々に取れなくなっても、誰もアリセプトが原因だとは思いません。年齢のせいと思うはずです。

易怒性も多く経験しました。アリセプトを飲むと、もともと怒りっぽい患者はほぼ全員さらに怒りっぽくなります。もともとおとなしい患者でも、３割ほどが怒りっぽくなります。ひどい場合は興奮して家族が抑えられなくなり、入院患者では暴れて手足を安全帯で抑制しなくてはいけなくなります。怒りっぽくなると、それを抑えるために抗精神病薬を使わないといけなくなることが多くあります。

アリセプトを飲んでいる入院患者の中には抗精神病薬も服用している患者が少なからずいます。アリセプトの副作用を抑えるために服用している抗精神病薬で弱っていると思われる患者

も多くいるのです」

――歩行障害も、易怒性もアリセプトの副作用なわけですね。

「ところが本にもアリセプトの副作用は書いてなく、製剤メーカーに確認しても副作用はないという。正直、私の考えていることは間違っているかとも考えましたが、事実は目の前にあるわけです。

そこで私は2004年の途中から、アリセプトの開始量は規定の３mgではなく1.5mgとし、維持量は原則５mgの半分量の2.5mgとしました。すると明らかに患者の症状が良くなったのです。まず易怒性が減りました。また、半年、１年して足が弱くなる高齢の患者も減りました。減量することで歩行障害が良くなることもあり、例えば脊柱管狭窄症や膝痛など整形外科的な原因とされていたのが、アリセプトを止めることで歩けるようになることも実際にありました」

――そこでご自身で処方の調整をはじめました。

「アリセプト５mgで治療していたときには、１年、２年と経過すると認知症が悪くなり、身体が弱くなり通院困難になる例が多かったのに、半分（開始1.5mg、維持原則2.5mg）で治療したら、逆に元気な高齢患者が増えました。認知症も、物忘れはありますが、そんなに悪くなっていません。特に85歳以上の高齢の患者では、２年後も３年後も元気で在宅で家族と一緒に暮らせているケースが多くみられます。

アリセプトは、良い薬ではありますが、増量規定で決められた量を飲んでいくと、その過程で副作用が出ることがあるということがだんだん分かってきました」

（以下次号）

Profile

◆ひらかわ・わたる氏（56歳）

鹿児島大学医学部を卒業後、同大脳神経外科に勤務。1998年に埼玉県川越市の基幹病院である池袋病院に赴任し、現在は副院長、脳神経外科部長。脳卒中、頭部外傷などの一般外来および救急対応にあたる一方、認知症治療にも積極的に取り組み、地域の開業医に講演も行っている。

スキー　九州で生まれ育ったために40歳になるまで、ゲレンデを見たことはなかった。しかし、池袋病院に赴任後、スキーにはまり、わずか５年でバッジテスト１級となった。現在はインストラクター、川越市スキー連盟理事として、後進の指導にあたる（写真は平川氏本人）。